

奥村心雪

JOSHIBI no.185



プロとしての自信を。 18年目にしてやっと。

サンリオでシナモロールを生み、人気キャラクターへと育て上げた奥村心雪さん。才能に恵まれた創り手のように映りますが、自らの能力には長らく自信がなかったことを明かします。どんな難局にもめげず前進してきた奥村さんの足取りに迫ります。

Photo 鈴木陽介 Text 立古和智

女

子美に進んでサンリオをめざそうと思ったのは、サンリオでハローキティを育てた山口裕子さんが女子美出身だったからです。安定志向の両親には「絵で生きるといってもサンリオのキャラクターデザイナーだったら堅実だ」「サンリオに進むなら女子美に限る」と説明しました。勉強の意義を見失いかけていた高校当時の私にとって、楽しみは自作キャラをノートのすみに描くことくらいで、勉強漬けの日々は高校で終わりにしたかった。とはいえ才能があったわけはありません。当時通っていた絵画教室でも周りに比べて恥ずかしくなるほど低レベルでしたからね。そんな風でしたから女子美の授業についていくのは必死でした。同級生たちは私とは比べものにならないほど上手で、作品講評のたびに私は恥ずかしい思いをしたものです。けれども、ある制作課題に対して周囲がスタイリッシュな表現で挑むなか、私だけが色鉛筆の手描きイラストを提出して赤面していたら、ある先生が「君はかわいいイラストが上手なのだね」と褒めてくれました。みんなと同じをめざすのではなく自分の好きな「かわいい路線」を歩めばいい



い。そう自信を持てたのはこのときです。実際、女子美では誰もが人目を気にせず好きなことを追求します。同級生には坊主もいました(笑)。当時は「サンリオへ」という初志を貫徹するべく、学校からの課題と並行して自主的にキャラクターも描き続けました。そうして作り貯めた自信作を提出したのがサンリオでの一次選考です。二次選考となる面接では、憧れの山口裕子さんを前にして心臓が止まりそうになりました。いずれにせよ狭き門であるサンリオに、なんの才能もない私が入れたのは奇跡です。女子美のようにのびのびと創作に打ち込める学び舎に身を置いていたからこそでしょう。サンリオでの仕事は、ずっと絵を描いていられる上にお給料までいただけるので、新入社員の頃は申しわけなささへ感じるほどでした。そんな中、シナモロールのデビューが入社3年目で決まったときは本当に夢のようでした。いうまでもなくキャラクターは商品ですから、当然セールスを追求します。デザイナーはプランナーをはじめ周囲

と積極的にコミュニケーションをほかり、さまざまなトレンドを取り入れるのが常です。シナモロールの場合なら、シナモロールパンに似たクルクルの尻尾や、カフェに住んでいるという設定。これらは当時の時代性や流行を取り入れた部分です。ほかにも子どもがおしゃれに敏感になりだした時代でしたから、おしゃれな雰囲気も付け加えました。そういった試行錯誤を重ねるにつれてシナモロールは人気を得ていきます。そもそも魅力的なキャラクターが次々と生まれてくるこの世界でキャラを存続するには時代を意識したアップデートは必須です。ほかにもファンの成長に合わせて、キャラを大人っぽくアレンジすることもあります。子どももだんだんファンが大人になり、その子どもからも愛されるという好循環をなんとか育みたいですね。ちなみにシナモンのデザイナーである私自身が「シナモンってこんな場所、こんな商品になっていたの」と驚くこともあるほど、この子は私の手を離れ一人歩きしています。そのあた

りもキャラクタービジネスの魅力です。そんな私にとって、キャラクターのデザインとは、私の頭にいる存在を現実空間に引き出す行為です。かつて「シナモンは何を語るのだろう」「どんな動きをするのだろう」と努めて想像する日々を重ねました。結果、シナモンが私の一部となり、頭のなかで勝手に動き出すようになったのです。生ききとしたキャラクターはデザイナーの想像力にかかっていると実感しました。今でも描いているときが一番幸せです。シナモロールも紆余曲折を経て、今年で15周年。最近ようやく私も「キャラクターデザイナーです」と胸を張って名乗れるようになりました。ずっと自分の作るものに自信を持ってなかった私ですが、同じことをこれだけ続けてこそ自信だと思えます。消え去るキャラも多い世界ですが、シナモンはハローキティやマイメモロディみたいに永遠の存在にしたい。私の死後も愛され続ける不滅の存在にしようという思いで一杯です。

奥村心雪(おくむら・みゆき)

埼玉県生まれ。1999年、女子美術短期大学造形科を卒業後、サンリオでキャラクターデザイナーに。入社3年目の2002年にシナモロールをデビューさせ、サンリオではハローキティに次ぐ人気キャラクターへと育てる。2017年にはデビュー15周年を迎えた。2007年にルロロマニック、2010年にウィッシュミールを発表。株式会社サンリオ執行役員、キャラクタークリエイション室長。

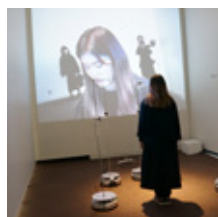
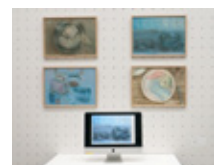


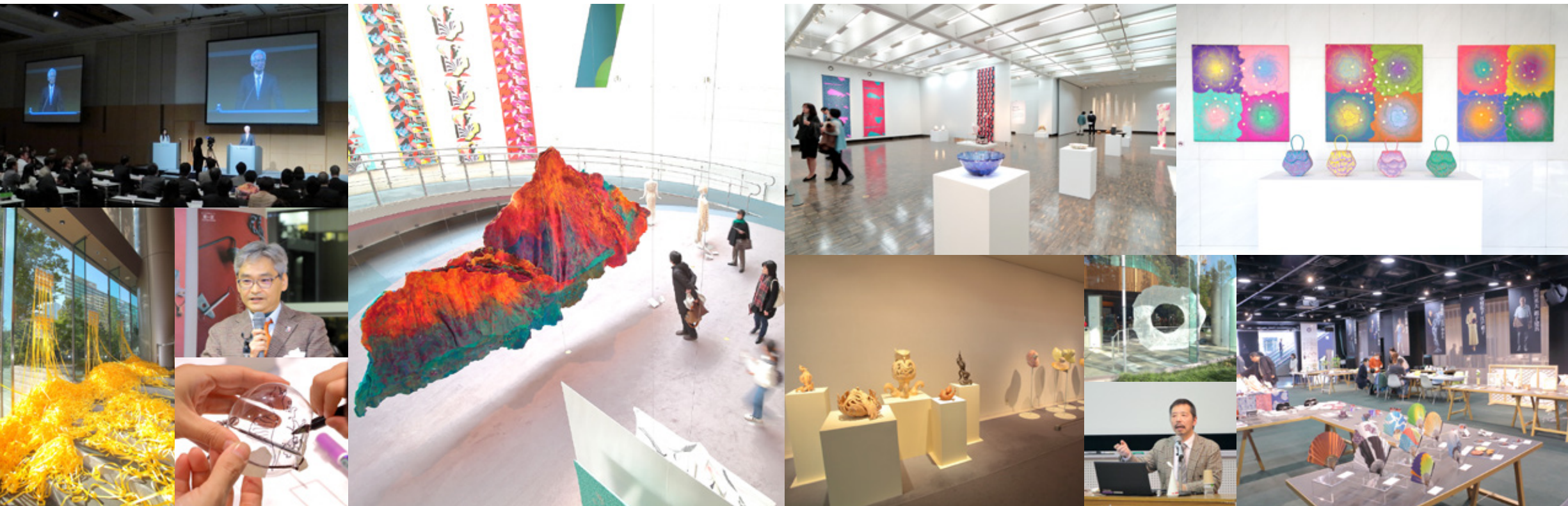
付属から大学院まで女子美生が大集合

「JOSHIBISION 2016ーアタシの明日ー」、開催

「オール女子美」のスローガンのもと、大学院、芸術学部、短期大学部、それぞれの研究室から選抜された35名の学生の作品と付属高校の卒業制作作品が一同に会する学外展「JOSHIBISION」の第2回を、3月2日～7日まで東京都美術館で開催しました。タイトルは、「JOSHIBI×EXHIBITION×VISIONをつないだ言葉から名づけられ、「今を生きる、等身大の学生たちのさまざまな視点が集まり、ともに未来を見つめていこう」というメッセージが込められています。女子美の魅力が凝縮されている本展覧会のディレクターは本学短期大学部造形学科教授の山本雄三先生が担当されました。「唯一無二の表現者として、今置かれている『現実』と向き合いつながり、独自のフィルターを通し、未来ある社会へ、等身大のメッセージを発信しています」とコメント。アーティ

スト、クリエイターとしてはまだまだ始まったばかりの彼女たちへ、今後の期待を述べられました。初日である2日にはレセプションを開催。さまざまな企業や画商、ギャラリーの方々を迎えし、学生たちにとって学外の方々に作品を見ていただける貴重な機会となりました。スライドに作品を投影し一人ひとりが自身の作品をアビールした後、会場のあちこちでポトフォリオを持って参加者の方々とお話しする学生たちの姿が印象的でした。最終日である7日には、現在、ラフォーレ原宿の年間広告メインビジュアルのアーティストディレクターを務めるステイブ・ナカムラ氏を迎え、出展作品に対しての作品講評会を実施。実際に会場内を移動しながら出展作品に対してお話をいただきました。どちらのイベントも、これまでの制作活動への自信と今後のエネルギーとなるような機会になったのではないのでしょうか。絵画、立体、デザイン、工芸など、女子美生の作品が会場を埋め尽くし、中には来場者参加型の展示もあり、充実した展覧会になりました。





日本の工芸を未来につなぐイベント「21世紀鷹峯フォーラム第2回 in 東京」が、10月22日から1月29日の100日間にわたり開催されました。昨年京都で開かれた第1回大会の「京都提言」を引き継ぎながら、本学美術館館長の馬場章先生が実行委員会の会長を務め、「工芸を体感する100日間」というテーマのもと、期間中100の団体による多彩なイベントが、東京の美術館、博物館、大学、研究所等で実施されました。このプロジェクトには3つの大きな目的があります。第1は、よき作り手とよき使い手、そして鑑賞者を生み出すこと。第2は、よいものをつくり続けるための支援。第3は、国内外の現代の生活の中に工芸が行き渡ることです。110余年の歴史を誇る本学は、工芸分野において、まさにこの3つを探索し続け、実現する人材を育てています。このプロジェクトの発足者である林

業、修了制作展「想像×創造」——116年の伝統と躍動する工芸女子——も、鷹峯フォーラムのイベントとして位置づけられました。学生たちが魂を込めて制作した作品は、デザイン、アート、工芸というジャンルを超えて、美しく、楽しく、力強く、鮮やかに未来に向かっていきます。工芸の可能性と未来を感じさせる展示で、教員展と共に伝統を繋ぎ、未来の工芸を創っている本学の姿勢が伝わる貴重な機会となりました。最後のイベントとして「100年後の工芸のために」と題した田卓会議が1月29日に東京ミッドタウンで開

催。田英樹先生は、未来の工芸にとって、ますます女性の感性や創作活動が重要な役割を担うとの期待をされています。期間中、女子美アートのミュージアムにおいて、本学デザイン・工芸学科工芸専攻教員による作品展「創る、伝える、繋がる」を開催。記念講演として金沢21世紀美術館館長の秋元雄史先生に「現代アート化する工芸」と題し、工芸が持つデザインとアートの可能性について数多くの重要なお話を頂きました。また産学連携の試みとして14年間続けている江戸川区の伝統工芸者との活動の発表を渋谷ヒカリエで行いました。「えどがわ伝統工芸×女子美術大学」では、学生たちがワークショップを運営しました。普段、伝統工芸に触れる機会の少ない若者や外国の方、子供たちに数多く来場して頂くことができました。毎年青山スパイラルガーデンで行われている本学デザイン・工芸学科工芸専攻の卒

業。京都大学総合博物館准教授の塩瀬隆之先生のファシリテーションで、「作り手」と「つかい手」と「つなぎ手」というさまざまな分野の方々から貴重な意見が交換されました。最後に本学の馬場先生から「東京宣言」が発表され、「日本工芸週間」の提案やオリンピック・パラリンピックの開催に対するかわり方への提案、工芸を支える素材・道具についての仕組みづくり、工芸教育への支援などの意思が表明されました。今回、本学の教員、職員、学生の多くの力を結集して、工芸の未来につながるすばらしいイベントとなりました。



学校法人女子美術大学
理事長 福下 雄二

本学は、今から117年前、横井玉子、佐藤志津という二人の女性により、芸術による自立した女性の育成を建学の精神として創立されました。そして今日に至るまで、女性芸術家、デザイナー、美術教師、さらには芸術分野だけでなく社会のあらゆる分野で活躍する数多くの卒業生を輩出してきました。皆様には、本学で美術・芸術に係る知



学長 横山 勝樹

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。私たち「女子美」は、新しい仲間となったみなさんを心から歓迎しています。女子美術大学・女子美術大学短期大学の建学の精神は、「芸術による女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家・美術教師の養成」です。女子美の先生たちは、この言葉の意味を考えながら、美術とデザイン、そして関連する学問の世界で日々制作と研究を実践している人々です。みなさんの先輩たちも、先



短期大学部部长
小林 信恵

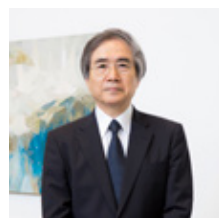


芸術学部部长
橋本 弘安



大学院美術研究科長
稲木 吉一

新入生に向けて

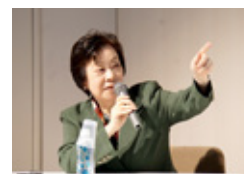


識と技術を学ばれ、感性を磨かれ、芸術を創造していく力を身に付けていただけるよう研鑽を積んでいただきたいと思います。そして、人と人との出会いや御縁を大切に、良き友人に恵まれ、良き先生に巡り会い、良き書物に出会えるよう努力していただき、豊かで充実した学生生活を送っていただけるよう期待しております。

生たちとともに117年間この精神を受け継いできました。みなさんもこの言葉の意味をぜひ心に留めて、これからの大学生活を送ってください。21世紀は、地球環境・世界平和の問題など、難しい問題が山積している時代です。それゆえに日々の制作と研究を通して、女子美の建学の精神を世界に発信していくことが、私たち、つまりみなさんの使命です。女子美でたくさん仲間を見つけてください。そしてみなさんの活躍に期待をしています。

特別公開講座「宇宙・人間・アート」で、本学客員教授である萩尾望都先生とイルカ先生の対談が開催されました。ご活躍されている先生方による今回の対談は5年越しに実現したこともあり、一般聴講の事前申し込みは応募が殺到。はじめにイルカ先生から、息子さんのお名前を『冬馬(とうま)』と名付けたところ、「萩尾先生の代表作の一つ』『トーマの心臓』を読んで名付けたのですか?」というお手紙が多く届いたそう、萩尾先生の作品を手取るきっかけとなり、不思議なご縁を感じたとのお話がありました。それぞれの学生時代についての話題では、「女子美に入っていなかったら歌っていなかった」とイルカ先生。当初、陶芸家になりたくて女子美に進学したが、JFC(女

子美フォークソングクラブ)のポスターを見て、元々ギターをしていた血が騒いだそう。「常に自分に正直に生きたい」というお言葉が印象的でした。萩尾先生は高校時代に『新撰組』を読んで「この世界へ行かなきゃ」と思い、漫画を描き始めたそう。多くの受賞歴を持つ萩尾先生ですが、漫画家という職業を親に反対されていた時期が長く、反対をエネルギーに変えて描き続けていたとお話されました。他にも「ポーの一族」続編の裏話やイルカ先生の着物作家としてのお話、まだまだ学びたいことがあると熱心な先生方の姿に参加者も刺激を受けた様子でした。最後に先生方の貴重なツーショット撮影会が急遽行われ、会場は大いに盛り上がりました。



漫画家 萩尾望都先生 ×
シンガーソングライター イルカ先生
特別対談開催

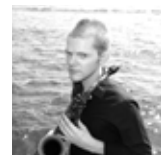


玉川 竜

芸術学部 デザイン・工芸学科
 ヴィジュアルデザイン専攻
 特任准教授

クリエイターとは何でしょう。感性が鋭い人達？では、感性を鋭くするにはどうしたらいいのでしょうか？普段生活をしている上で身の回りの物を「見る」「聞く」「触る」という事を少しだけ意識してみてください。その感じたものを自分の頭の中にストックして、何百段、何千段のアイデアの引き出しを作るのです。女子美で引き出しを増やしつつ、必要な時はどんどん引き出しを開けて行きましょう。その引き出しが多ければ多い人ほど「スゴイ」クリエイターに近づけるのですから。

1964年東京生まれ。桑沢デザイン研究所リビングデザイン科卒業。デザイン事務所勤務を経て、渡仏。独学で写真を習得し、帰国後フォトグラファーとしてデビュー。ファッション写真や企業広告や俳優、ミュージシャンのポートレイト等を手掛ける。

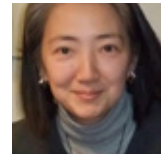


サイモン・コスグローブ

芸術学部 教養
 特任助教

美術とデザインに限らず、音楽や言葉の「音」を通してコミュニケーションができる物は全てアートです。毎日やかましい音に囲まれている21世紀のモダンライフですが、その中で「音の美」を探し続けます。鳥の声、波の音、カフェで無意識に聞き流すジャズのBGMなどに耳を傾けじっくり聴くと深い世界が広がります。音楽と美術との密接に絡み合っている歴史や文化を発見し、講義で伝えていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

1982年イギリス生まれ。ケンブリッジ大学音楽学部修士修了。2000年BBC音楽コンクールで受賞し2004年大和日英基金の奨学金で来日。プロジャズミュージシャンとして全国で活躍中。



関 直子

芸術学部 共通専門
 特任教授

創造活動は、美術館をはじめとするパブリックな展示や公私のコレクションでの保存、またテキストによる記述や画像データが蓄積されることで、広くそして永く記憶されていきます。かたちある作品だけでなく、物質としては残らないパフォーマンスやインスタレーション、そして作品と資料のあわいにあるものにも目をくばり、いまの視点から、創造活動とその展示や公開の可能性を探っていきましょう。

東京都出身。早稲田大学大学院にて美術史を専攻。東京都美術館、東京都現代美術館開設準備室を経て、1995年の開館より同館学芸員として展覧会を企画・実施。



澁谷 克彦

芸術学部 デザイン・工芸学科
 ヴィジュアルデザイン専攻
 特任教授

良いデザインはデザイナーの最終目的ではありません。重要なことを伝えたり誰かを幸せにすることが目的で、デザインはそれを達成するための形です。でもそれが最高に綺麗だったり、かっこよかったりすることで、人々は気持ち上がり幸せなイメージをふくらますことができるのです。大学は多様な才能や、多様な美しさや面白さの存在を知ることができる場所。あなたがこれからデザインを使って達成したいこと、そのプロセスが好きで楽しくて、やりがいのある何かを見つけてください。

1957年東京生まれ。東京藝術大学デザイン科卒業、資生堂宣伝部入社。数多くの広告のアートディレクションやグラフィックデザイン、「花椿」の編集デザイン、グローバルブランドのトータルクリエイティブディレクションを手がける。



阿部 大介

芸術学部 美術学科
 洋画専攻(版画)
 特任准教授

作品と向かい合う時間は、自分や社会と向かい合う事だとつくづく感じています。芸術の表現方法は多岐へと広がっています。流行に惑わされずに、自分や社会としっかりと向かい合いながら、独自の表現を模索して頂けたらと思います。皆さんと共に制作の現場で考え学び、充実した大学での時間が過ごせる為の一助になれば幸いです。

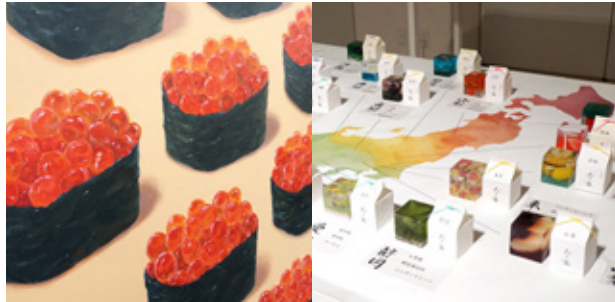
1977年京都府生まれ。愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了。版画を軸にしなが、様々な表現方法で制作、発表を行っている。

退職された先生方

芸術学部			教授	太田泰人
芸術学部	美術学科	洋画専攻(絵画)	教授	田中いっこう
芸術学部	美術学科	洋画専攻(版画)	教授	馬場章
芸術学部	美術学科	芸術文化専攻	教授	北澤憲昭
芸術学部	デザイン・工芸学科	ヴィジュアルデザイン専攻	教授	井上悦治
芸術学部	デザイン・工芸学科	ヴィジュアルデザイン専攻	教授	茅野義博
芸術学部	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	教授	羽太謙一
芸術学部	アート・デザイン表現学科	ファッションテキスタイル表現領域	教授	佐久間恭子
短期大学部	造形学科	美術コース	教授	弘中雅子

3月10日～12日、杉並と相模原の両キャンパスで芸術学部・短期大学の2016年度卒業制作展／修了制作展が開催されました。開催期間最終日には、芸術表象専攻優秀卒業研究および、大学院修士論文発表会が相模原キャンパスで開催。学生生活の集大成である卒業制作や、同期間に開催している大学院の修了制作を鑑賞するため、多くの来場者がキャンパスを訪れました。

2016年度卒業制作展／ 修了制作展、開催



女子美祭 2016

10月28日～30日の3日間、杉並、相模原の両キャンパスで女子美祭が開催されました。今年も雨模様でしたが、学生たちは雨にも負けない活気で女子美祭を盛り上げていました。作品展示はもちろん、ワークショップや模擬店、自作グッズの展示販売も大盛況。連日たくさんの方にお越しいただきました。杉並キャンパスでは俳優の千葉雄大さんのトークショーが、相模原キャンパスでは、アイドルグループゆるめるモ！さんのライブパフォーマンスと、俳優の北村諒さん、漫画家の古屋兎丸さんの講演会がそれぞれ開催されました。これらは開催前から話題になっていたイベントだけあって、当日も整理券を求める方々が多く見られました。

保科 晶子

なぜ海外で活動・仕事することを 選んだのですか？

海外で活動しようと一大決心をしたというよりは、自分の興味のある方向へ進んでいったら、今の場所へたどり着きました。大村文子基金女子美パリ賞を受賞し2008年4月から1年、パリ国際芸術都市のアトリエで制作活動をしました。滞在の後半、ビジターアーティストとしてではなく、フランスで活動することがどんなことなのかをもっとリアルに知りたいと思うようになったので、粘ってフランス滞在を続け、人に会い、こんなことをしたい、あんなことをしたいと夢を語るうち、展覧会や仕事が舞い込むようになりました。

女子美時代は、 どんな学生でしたか？

遅くまで制作をして、大抵20時20分の最終バスで帰っていましたから、比較的に遅い、でも生意気だったと思います。限られた時間や制限がある課題で、どうやったら独自な表現ができるかなといつもたづねていましたから。

女子美時代の印象深い思い出を 教えてください。

当時教授だった伊藤公象先生との出会いは衝撃でした。ヒアリングから始まり、コンセプトにより材料や技法を選んでいく課題に取り組むのは、答えのないとちを紐解くようで、現代陶芸の可能性を感じました。学部時代、授業内で、版画、デザイン、彫塑、金工など、異なる媒体にチャレンジできたことも有意義でした。様々な技法を体験できたことはもちろん、先生方の経験談などを聞くのがとても好きでした。大学院時代、個人でチャレンジした広島国際学生アートフェスティバルに入選し、現地へ赴き様々な国の美術学生たちと交流したことは、大きな刺激となり、いつか海外で活動したいと思うようになりました。また院2年目は、建業内の陶装飾プロジェクトや、芸術学校で非常勤講師を務めるなど、プロジェクトをどのように実現するか、芸術活動をどのように社会に結び付けていくかを体験する貴重な時間を過ごしました。

美大の中でも、 女子美を選んだのはなぜですか？

中学3年のときに女子美祭を訪れ、校風にとっても魅力を感じ、大学進学も視野に入れ女子美術大学付属高等学校に進学しました。付属には女子美出身の先生が多く、教壇に立ちながら作家活動を行い、独自の表現を追求されていて、そのような先生方との交流から、私もアーティストになりたい、女子美に行きたいと思うようになりました。

Q 1

Q 2

Q 3

Q 4



『痕跡』陶 2016年
2016グループ展「S0LV」Gold-Smidt Assembly London
撮影者 Sylvain Deleu



展覧会会場風景
2016グループ展「第19回DOMANI・明日展」国立新美術館
撮影者 Kazushi Suzuki

制作・仕事をする上で 大切にしている考え方を教えてください。

粘土に対してとても敬意を持っています。作品を作るとき、粘土の中にあるものを、恐れ入りますが私が探し出させてもらいますよ、大切に扱いますからね、と素材と対話しているような感覚があります。陶が出来上がるまでのプロセスや焼くという行為を儀式のように感じるので、自然にそうなんだと思います。また、意識して大切にしていることは、毎回のプロジェクトに何かひとつでも新しい発見や進歩があることです。



『おぼえてる？ーみずたまのピジャマ』陶 2016年
撮影者 Naoe Baba



『Dentelle d'argile』粘土 2015年
2015 グループ展「3 regards sur la céramique contemporaine」
116- モントルイユ市現代美術センター
撮影者 Naoe Baba

保科 晶子 (ほしな あきこ)

1996年女子美術大学大学院美術研究科陶造形コース修了。2007年女子美パリ賞受賞、2010年ルズー陶芸美術館にて滞在制作、2012年文化庁新進海外芸術家派遣制度を受けパリに1年間派遣。シャトールー市国際陶芸ビエンナーレ、旧在日フランス大使館NO MANS LAND、第19回DOMANI明日展など数多く展覧会を行う。現在はパリ郊外モントルイユを拠点に活動。
www.akikohoshina.com



大学時代にやっておくべきことについて、 アドバイスをお願いします。

ふるいにかけて体験が多ければ多いほど、残ったものの価値は高くなるってくださった先輩がいました。学校の外に出て、展覧会や映画を見たり、旅をしたり、興味のある分野での実体験を沢山して感性を磨いてください。無駄かな、なんてことが案外役に立つかもしれません。そんな中から生きる賢さ、自分独自の考え、身を守る術など、自分の哲学を見つけて欲しいです。そして、出会いを大切にしてください。信頼できる友人、困ったときに相談できる先輩や先生、恋人や家族は人生の素敵な贈り物です。そして助けられれば、いつかほかの誰かを助けることも忘れずに。

海外で制作・仕事をするための “楽しさ”を教えてください。

皆さん、フランス語特有の「チュトワイエ、ウヴォワイエ」をご存知でしょうか。初対面の人や上司とは敬語の「ヴヴォワイエ(あなた)」、家族や親しい友達とは「チュトワイエ(きみ)」と、人間関係により主語と動詞の活用が変わります。展覧会やレジデンスなど、長期間に亘りチームで仕事をするとき、はじめはウヴォワイエで話していたスタッフたちとチュトワイエで話すようになると、気持ちも打ち解け、仕事もトントン拍子で進みます。こんな風に人間関係を育みながら計画を実現していく過程は楽しいですね。また、現在2歳半の息子がいて、子育てしながら活動をしています。もちろん家族の理解あってこそですが、それに加え、フランスは、精神的にも社会的にも仕事と子育てを両立しやすく、産後4ヶ月で女性が仕事に復帰するというのは普通!母であり、作家であり、日本人であり、自分自身である、どれかを選ぶのではなく、いくつかの「肩書き」を持っていることは幸せだなと思います。

やりたいことや夢を実現するための ヒントを教えてください。

続けること、そしてネバーギブアップの精神!本当にこれだと思ったら、とことんやる。ちょっとした失敗であきらめないで、やり方や見方を変え、人にアドバイスを貰ったりして何度でもチャレンジする。しつこくやっていると、何かしら見えてくると思います。そうやって皆さんが手に入れたものは、誰も奪うことができないゆるぎないものになります。

後輩(女子美生)に 一言メッセージをお願いします。

活動をしていると、へこたれそうになる時も訪れます。それでも、皆さんがやっていることを見ていてくれる人が必ずどこかにいて、続けていると、そういう人たちがふとチャンスくれたりします。そんなことって、タイミングは違えど、皆に訪れるんじゃないかと思うので、悩んだり迷ったりしても大丈夫。自分を信じ、丁寧に考え、淡々と日々を続けてください。又、どうしようもなかったら、手放すことで手に入るものも実はあるんです。そして女子美生らしく楽しむこと、感謝と謙虚さを大切にしてくださいね。

Q 6

Q 7

Q 8

Q 9

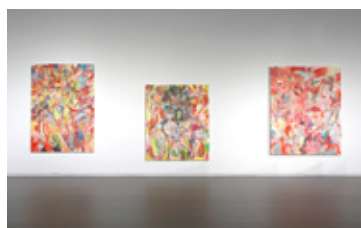


photo: Keizo Kioku



photo: Keizo Kioku

「画と機」 東京オペラシティ アートギャラリーにて開催

本学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻(洋画)に在籍中の朝倉優佳さんが、世界的ファッションデザイナーで本学客員教授でもある山本耀司先生と作品を交えた展覧会「画と機」が、12月10日～3月12日にわたって東京オペラシティアートギャラリーにて開催されました。展示フロアには展覧会までに描き上げた大小さまざまなキャンバス、ガラスに大胆なペイントが施された作品、ヨウジヤマモトとのコラボレーションピースやそれらに用いられたプリントの原画となる作品などが並び、会場を彩りました。2016年春夏メンズ&ウイメンズコレクションから数シーズン、ヨウジヤマモトとのコラボレーションに取り組み、青山本店の壁画制作やエントランスウィンドウのライペインティングなど積極的に展開してきた朝倉さん。「服とともに仕

事をした1年半でした。山本先生のもとで今までにないペインティングワークを経験させていただき、それまで表現したことなかった「色」や描いたことなかった「線」が自分の作品にあらわれるようになりました。自分ひとりでの活動だけでは生まれなかった表現が、キャンバスに描く絵画と離れた時間からめぐりめぐって自分のもにかえてきました」。もともと色彩豊かなペインティングで作品を描いてきた朝倉さんは、山本先生独特の「黒」の表現に出会い、自身の世界観や表現の幅も広がったと言います。これまでの活動と今回の展覧会を通して「アウトプットし続けてきたようでした。自分の作品と向き合う時間が見つかったら」と笑顔で話してくれました。



Painting and Weaving Opportunity: Yohji Yamamoto - Yuuka Asakura Installation view at Tokyo Opera City Art Gallery 2017 photo: Keizo Kioku



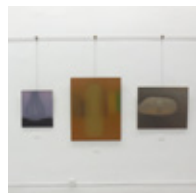
朝倉優佳

1988年東京生まれ。2011年女子美術大学洋画専攻卒業。2012-13年野村財団芸術文化助成を得てドイツ・ニュルンベルクにて活動。帰国後同大学大学院修士課程を修了し現在同大学博士後期課程在籍。個展・グループ展など受賞多数。ファッションブランド「ヨウジヤマモト」のコレクションピースに2016年春夏より数シーズン作品が用いられた。その他、壁画制作など幅広く活動。

出身作家による作品展、上海で開催

2012年より本学と上海交通大学は芸術による交流を行って参りました。2015年度より上海交通大学内のギャラリースペース「開明画院」に活動拠点を移し、「Toshihi Art Gallery: Shanghai」としてギャラリー展開を行っており、昨年引き続き2回目となる本学芸術学部美術学科洋画専攻、日本画専攻出身の作家による展覧会が開催されました。はじめに、昨年12月3日～12月22日に本学芸術学部美術学科洋画専攻出身作家6名(岩本麻由、坂内直美、小松美里、宮木沙知子、堀込幸枝、室井麻未)による展覧会「若

手卒業生による絵画展 Part 2」が開催。続いて、2月10日～3月10日には本学出身の若手作家による日本画作品展「青年画家日本画作品展 Part 2」が開催されました。本学教員だけでなく大学院生を含め総勢18名が出品。洋画、日本画それぞれの分野による多彩な作品が会場を彩り、見応えのある作品の数々は会場に訪れる人々を楽しませました。期間中レセプションが開催され多くの人が足を運び、日本文化に関心を向けている方も多く、制作技法や考え方の違いについて意見交流を行い、賑やかな展示となりました。



宇宙と芸術、ファッションの接点とは 山崎直子先生特別講演

芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域客員教授で宇宙飛行士の山崎直子先生による特別講演が12月5日に杉並キャンパスで開催されました。山崎先生は宇宙で実際に行われた芸術実験の様子や、宇宙と地球をつなぐアートプロジェクトの様子をスクリーンに投影。宇宙では科学実験だけでなく芸術実験も行われていることを教えてくださいました。また、宇宙船内で着用する服には日本の優れた繊維技術が活用さ

れていることや、快適性や機能性に加え美しさも採り入れたファッションを追求する「宇宙船内服プロジェクト」を紹介。この活動には本学のプロジェクトメンバーも参加しており、今後もさまざまな取り組みが行われる予定です。講演会の最後には在学生に向けて「宇宙と芸術、ファッションのプロジェクトでみなさんと一緒に取り組めることを楽しみにしています」とメッセージをいただき、会場は大きな拍手に包まれました。



ノーベル賞を育んだ原風景に 津田裕子先生による 大村智先生の銅像建立

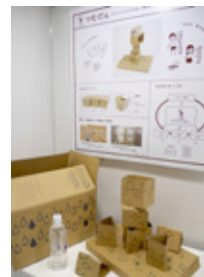
本学名誉理事長 大村智先生の2015年ノーベル医学・生理学賞受賞を記念して、郷里韮崎市では少年時代の通学路を「幸福の小径」と名付け、2016年12月に本学名誉教授の津田裕子先生が制作した大村先生の銅像が設置され、建立式が開かれました。銅像の眼前には富士山が望み立ち、360度のパノラマ景観を楽しめる絶好のロケーション。式典時はメディアや地元関係者など多くの方々がお見えになり、本学からも福下雄二理事長、横山勝樹学長、小倉文子理事、そして制作者の津田先生が参列し、内藤久夫韮崎市長と共に銅像の除幕に参加されました。

NEWS — & — TOPICS

楽しみながらエコできる 女性視点のデザインを提案！ エコプロダクツ2016

12月、日本最大級のエコイベント「エコプロダクツ2016」に本学デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻がプレゼンテーションブースを出展しました。このイベントへの出展は、大学での授業やプロジェクトの成果を発表し、来場者の意見を直接聞くことができる貴重な学びの場となっています。4年生の授業課題「エコデザイン」で取り組んだ「環境貢献への提案」「防災への意識を高める作品」「避難所などで人の心を癒す提案とその作品」などが注目を集めたほか、1～3年生のプロジェクトメンバーと本学付属高等学校2年生によるアップサイクルデザインの取り組みも紹介。製造工程で廃棄されたさまざまな材料がカラフルで可愛いグッズに生まれ変わりブースを彩りました。イベント期間中は不織布や東北地方の間伐材で作ったうちわを使ったワークショップも開催され、来場者はエコなモノづくりを実際に体験しながら学生たちの話に熱心に耳を傾けていました。

プロジェクトマネジメント 芸術学部 デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻:主任教授 松本博子



「デッサンは危機に瀕している」 ドローイングシンポジウム2016開催

11月26日、相模原市立市民・大学交流センター ユニコムプラザさがみはらにて第1回ドローイングシンポジウムが開催されました。このシンポジウムは「デッサンは危機に瀕している」という時代認識から、デッサンとは何か、その危機に向き合うスタンスについて考えることを目的に本学美術学科教員有志によって企画されたものです。美術評論家で近現代美術史を専門とする北澤憲昭先生の基調講演で幕が開き、大森悟先生、鈴木淳子先生、平戸真見先生、福土朋子先生、宮島弘道先生がそれぞれの研究領域・専門分野の観点から発表を展開。改めて「描くこと」の可能性を見つめ直しました。北澤先生の総評につき招聘コメントーターやシンポジウム参加者と発表者によるディスカッションも行われ、デッサン、ドローイングについてさまざまな言葉が行き交う意義深い時間となりました。



07 |

マーラ・セルベット客員教授 特別講義



10月24日、相模原キャンパス2号館224教室にて、本学の客員教授であるマーラ・セルベット先生による特別講義が行われました。イタリア・ミラノにあるセルベット先生のデザイン事務所は、建築・空間構成・プロダクト・インテリアなど幅広い分野で業績をあげ、国際コンペ等受賞歴も多数ある著名な事務所です。今回は「光とデザイン」をテーマに授業が行なわれ、主に空間や作品についての光の使い方や、演出方法を詳しくご説明されました。実際にセルベット先生の事務所が担当された企業の商品ディスプレイ・インテリアの写真、動画のご紹介もあり、学生は大いに刺激を受けました。ご講演の最後に、セルベット先生から学生に対して「デザインにおいても、人生においても光を取り入れてほしい」と、激励の言葉が送られました。

08 |

洋画専攻4年生卒業制作内覧会「Pre Exhibition REVOLVE」



12月19日、芸術学部洋画専攻4年生が主催する、卒業制作内覧会「Pre Exhibition REVOLVE」の展示が、今年も相模原キャンパスにて開催。内覧会初日には、美術手帳編集長である岩淵貞氏と、東京藝術大学准教授で美術家である杉戸洋先生の2名をゲストにお迎えして講習会が行われました。学生一人ひとりが卒業制作の作品に対してのコンセプトや、作品に込めた想いを話した後、お二人より作品の構図や色使い、バランス、卒業制作展に向けての作品展示方法等、貴重なアドバイス

をいただき、熱心に耳を傾ける学生の姿が印象的でした。総評の最後には、学生から岩淵氏と杉戸先生に向けてお礼の言葉と花束を贈呈。お二人からは「卒業後は、仕事や家庭等と両立して作品制作を行うのは難しいと思いますが、これからの色々な経験や心境変化で、今より良い作品を生み出せる可能性もあります。是非あきらめずに作品制作を続けてほしいと思います」と、激励の言葉が送られました。

05 |

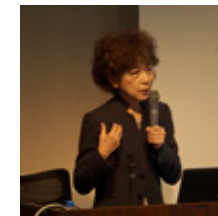
ICAF 2016



国立新美術館で開催されたインター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル (ICAF) は、今年で14回目を迎えます。大学や専門学校などの教育機関で制作された学生作品を上映する学生アニメーションの映画祭で、日本全国より27校が参加しました。今年も本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域の羽太謙一先生や季里先生の推薦によって選ばれた在学生・卒業生の作品が上映されました。「大きな会場で自分の作品が上映されることが嬉しいです」と学生。懇親会には出品した学生が集まり、参加校や企業の方々と触れ合える貴重な機会になりました。また、会期中は他大学・専門学校が制作したアニメーション作品を見ることもでき、今後の制作活動への刺激となるイベントに。東京での上映後は地方でも巡回上映が行われました。

06 |

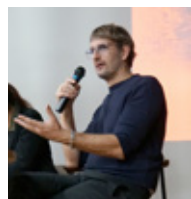
いせひでこ客員教授 特別講義



杉並キャンパスの7号館7201教室にて、芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域客員教授いせひでこ先生による「宇宙・人間・アート」の特別講義が開催。講義のテーマは「絵本一めぐりめぐる記憶の現場」。いせ先生がこれまでに制作された絵本を、制作エピソードを交えながらお話しいただきました。いせ先生は、ご自身が体験された出来事や、現場の空気や温度をスケッチに残したものをもとに、物語を紡ぎだしています。その中でも、『ルリユールおじさん』では、パリの旅行中に

出会ったルリユール(製本職人)がモデルとなっており、取材から絵本が完成されるまでの制作過程を紹介されました。60工程を全て手とする職人の物語は仏訳版も出て、パリで行われた原画展についても詳しくお聞きすることができました。「絵本は作ろうと思っただけのものではない。モチーフに導かれ徹底した現場取材、そこから見えてくるもの、気づき、実感などが重要」「絵本に限らず、制作はプロセスが大事」「スケッチで手に記憶させること」。学生たちの真剣な眼差しが印象的でした。

11 |



イケムラレイコ先生 ダニエル・リヒター先生 公開対談

芸術学部美術学科洋画専攻客員教授のイケムラレイコ先生と、外国招聘特別講師のダニエル・リヒター氏による公開対談が12月6日に相模原キャンパス10号館1011共同スタジオにて開催されました。20代で単身ヨーロッパに渡り、現在もドイツを中心に絵画、彫刻、ドローイングなど多岐にわたる表現で活躍中のイケムラ先生と、1990年代半ばから強い色

彩の独自の絵画で世界各国から注目を集めているリヒター氏。おふたりの貴重な対談が聴ける場とあって、会場には在生学生だけでなく多くの教職員や聴講者が駆けつけ、真剣に耳を傾けていました。対談後には洋画専攻のアトリエ見学と学生作品鑑賞が行われ、講評希望の学生には作品講評もしていただくなど大変貴重な時間となりました。

12 |

太田泰人先生 最終講義 「壁を超えて－美術館の過去と未来」

2016年度で本学を退職された太田泰人先生の最終講義が1月12日に相模原キャンパスで行われました。太田先生は2012年度より本学で教鞭をとられ、大学院美術研究科芸術文化専攻教授として、また芸術学部の共通科目で多くの学生を指導いただきました。最終講義は「壁を超えて－美術館の過去と未来」と題され、1960年代末から現代に至るまでの美術館と社会の変遷を、写真やポスター画像を投影しながら解説。特に1980年代については海外と日本の美術館を比較し、海外留学中に会った現代美術館の様子や、帰国後に学芸員として勤務された神奈川県立近代美術館の様子などをお話いただきました。博物館学的視点からだけでなく、学芸員であり研究者でいらっしゃる先生の多角的な視点から展開された最終講義に、在生学生はもちろん、集まった教職員も熱心に耳を傾けていました。太田先生、これまで本当にありがとうございました。



09 |

地域活性化プロジェクト 東みよし町商工会×女子美術大学

本学と徳島県東みよし町は産学連携として地域活性化プロジェクトを実施し、デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻とアート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域の有志学生28名が参加しました。地元企業の高い技術力と女子美生ならではのデザイン力を融合して「20代の女性が欲しくなるアイテム」を生み出し、阿波踊りのコスチュームに見立て新しいパフォーマンスとして発表する企画を立案。現地のモノづくりに対するマインドを習得しながら作品を制作し実現に至りました。発表時の振付は「コンドルズ」主催のダンサーであり本学講師



の近藤良平氏に依頼し、阿波踊りの楽曲に合わせてパフォーマンスを表現。「今後の阿波踊りの方向性に一石を投じる内容だった」と好評を頂き、メディアから取材を受けるなど大きな反響がありました。学生たちがデザインした作品は12月から年始にかけて徳島空港内で展示され、出発ロビーを行き交うたくさんの方から注目を集めました。

プロジェクトマネジメント
芸術学部 デザイン・工芸学科 プロダクトデザイン専攻：主任教授 松本博子
芸術学部 アート・デザイン表現学科 ファッションテキスタイル表現領域：主任准教授 山村美紀

10 |

宇津木えりさん 特別講演 「挑戦して楽しむ！」

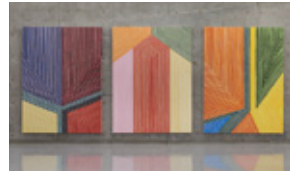
10月24日、芸術学部アート・デザイン表現学科主催の特別公開講座「宇宙・人間・アート」に本学卒業生でファッションデザイナーの宇津木えりさんをお招きし、『挑戦して楽しむ!』をテーマにご講演いただきました。2016年は宇津木さんがデザイナーを務めるブランド「mercibeaucoup.」がスタートして10周年ということもあり、講演会の前半は「mercibeaucoup.」のコレクションを映像でご紹介いただきました。後半はお洒落やファッションが大好きだった幼少期のエピソードや、女子美との出会い、パリへの留学体験、挫折と転機を繰り返した就職活動や社会経験についてユーモアいっぱいにお話いただきました。今後もファッションを通じた新たなものづくりに挑戦し続けるという宇津木さん。講演会終了後には在生学生から次々と質問が寄せられ、会場は和やかな雰囲気になっていました。



平成28年度 特別賞

順天堂 佐藤志津・小川秀興賞

学校法人順天堂と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として本年度より優秀な卒業制作に対して「佐藤志津・小川秀興賞」を授与いただきました。初回となる本年度は以下の学生が受賞し、3月13日に中野サンプラザで執り行われた本学学位・修了証書授与式当日、目録が贈られました。選出された作品は順天堂大学病院内に1年間展示されます。



『無題』 清水梨沙
芸術学部美術学科洋画専攻(絵画)

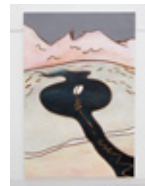


『あめつちの集まり』 久保美貴
芸術学部美術学科洋画専攻(絵画)

東京理科大学賞

学校法人東京理科大学と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2015年より優秀な卒業制作に対して「東京理科大学賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、3月13日に中野サンプラザで執り行われた本学学位・修了証書授与式当日、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は東京理科大学内に1年間展示されます。

学校法人 東京理科大学 理事長賞



『水たまり』 西川絵里
芸術学部美術学科洋画専攻(絵画)

東京理科大学 学長賞



『点と点と点』 中山逸花
芸術学部美術学科日本画専攻

東京理科大学 坊っちゃん賞



『Deep time』 小野澤久美
芸術学部美術学科洋画専攻(版画)

東京理科大学 マドンナ賞



『菜景』 増原菜里
芸術学部美術学科日本画専攻

ギオン相模原大賞 ギオン相模原奨励賞 ギオン相模原特別賞

株式会社ギオンは、相模原市に本社を構え「物流・健康・環境」など幅広く事業展開をする総合物流企業で、相模原キャンパスに隣接する「ギオンスタジアム」等のスポーツ施設の指定管理を行うなど、相模原市の地域振興に取り組んでいます。このたび、同市におけるより一層の芸術文化の発展を目指し、相模原キャンパスに在籍する卒業・修了年次生を対象とする賞を創設いただきました。初回となる本年度は、以下の学生が受賞。「ギオン相模原大賞」は副賞として100万円が授与され、作品1点が同社に提供されます。「ギオン相模原奨励賞」は副賞30万円、「ギオン相模原特別賞」は副賞10万円が授与されます。

ギオン相模原大賞	美術研究科 博士前期課程 美術専攻 日本画研究領域	横山美実
ギオン相模原奨励賞	芸術学部 美術学科 洋画専攻(版画)	清水理央
ギオン相模原特別賞	美術研究科 博士前期課程 美術専攻 工芸研究領域	藤田千鶴
	芸術学部 美術学科 日本画専攻	樋口綾香
	芸術学部 デザイン・工芸学科 工芸専攻	三浦萌子

13 |

えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト 第14回 新作発表会

江戸川区の伝統工芸者と女子美生による「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」。伝統の“技”と女子美生の“デザイン”が融合することで現代のライフスタイルに則した伝統工芸品を生み出すこのプロジェクトの新作発表会が開かれました。2003年から始まり2008年にはグッドデザイン賞を受賞、14年目を迎えた今年は78名の女子美生と14名の工芸者の方で、100点にも及ぶ作品を制作・発表。中でも優れた作品や人気の高い作品は実際に商品化される予定です。会場アンケートで最多得票数の短期大学部造形学科デザインコース創造デザイン2年生の白石桃香さんデザインによる組子建具作品「春夏秋冬」には「えどがわ賞(最優秀賞)」が贈られました。



14 |

陸前高田市立博物館 染織資料の修復プロジェクト

岩手県にある陸前高田市立博物館と本学研究所は、東日本大震災の津波によって被災した染織資料や文化財の安定化・保存・修復を目的としたプロジェクトに取り組んでいます。この活動は2016年度の大村文子基金「大村特別賞」(※P27参照)を受賞した染織品修復チームが、津波で被災した「高田歌舞伎」の舞台衣裳や地域の文化財に含まれる海水の塩分を除去する脱塩処置を実施。これまで本学が培ってきた文化財の保存修復経験と技術力がこの取り組みに活かされています。夏には学生ボランティアによる染織資料の安定化処理の活動が行われ、本学デザイン・工芸学科工芸専攻で刺繍を学ぶ学生が参加し大切な染織資料や文化財を守るための一翼を担いました。本学研究所では「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」をスローガンに今後も被災地支援につながる取り組みを続けていきます。



高田歌舞伎の舞台衣裳(袴)

平成28年度 卒業制作賞・優秀作品賞 等 受賞者

加藤成之記念賞

大学院	
王 京	美術研究科博士前期課程芸術文化専攻美術教育研究領域

芸術学部	
伊藤夏実	美術学科洋画専攻
佐藤真紀	美術学科日本画専攻
石渡美英子	美術学科立体アート専攻
岡本千裕	美術学科芸術表象専攻
松野加奈	美術学科美術教育専攻
森田裕美子	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
安藤花伶	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
川辺 香	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
比企麻美	デザイン・工芸学科工芸専攻
谷内玲奈	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
横田ちづる	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
岡安佐和子	アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域
庄野 萌	アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域

短期大学部	
小畑有季	造形学科美術コース
澤 あゆみ	専攻科造形専攻創造デザインコース

福沢一郎賞

大学院	
漆畑 流	美術研究科博士前期課程美術専攻洋画研究領域
豊川宏美	美術研究科博士前期課程美術専攻版画研究領域

卒業制作賞

芸術学部	
清水梨沙	美術学科洋画専攻
鳴輪紗也加	美術学科洋画専攻
西川絵里	美術学科洋画専攻
渡辺華奈	美術学科洋画専攻
黒部 咲	美術学科日本画専攻
箭内友里乃	美術学科立体アート専攻
近藤さくら	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
杉崎浩美	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
中川珠里	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
下田玲菜	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
川辺 香	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
赤坂 暉	デザイン・工芸学科工芸専攻
森 弥那子	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
松尾美沙	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
三谷桐子	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
岩澤菜生	アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域

※共同制作にて受賞

内田まこ	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
佐藤 唯	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
長村祐実	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
堀江紗友莉	アート・デザイン表現学科メディア表現領域

短期大学部 造形学科	
上田華子	美術コース
鈴木里来	美術コース
畑 翼	デザインコース情報デザイン
吉野菜由	デザインコース情報デザイン
白石桃香	デザインコース創造デザイン
須藤 環	デザインコース創造デザイン
眞家春奈	デザインコース創造デザイン
森本園子	デザインコース創造デザイン

大久保婁久子賞

大学院	
森下佐知子	美術研究科博士前期課程美術専攻洋画研究領域
近藤ひかり	美術研究科博士前期課程美術専攻日本画研究領域
山本まりか	美術研究科博士前期課程美術専攻版画研究領域
藤田千鶴	美術研究科博士前期課程美術専攻工芸研究領域
福留美奈	美術研究科博士前期課程美術専攻立体芸術研究領域
村重亜紀	美術研究科博士前期課程 デザイン専攻ヒーリング研究領域
清野優奈	美術研究科博士前期課程 デザイン専攻 ファッションテキスタイル研究領域

チン サン	美術研究科博士前期課程デザイン専攻 プロダクトデザイン研究領域
-------	------------------------------------

山内美紀	美術研究科博士前期課程デザイン専攻 環境デザイン研究領域
------	---------------------------------

青島絵子	美術研究科博士前期課程芸術文化専攻美術史研究領域
------	--------------------------

女子美術大学美術館賞

大学院	
横山美実	美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域

女子美術大学美術館奨励賞

大学院	
安村 粁	美術研究科博士前期課程美術専攻洋画研究領域
横山美実	美術研究科博士前期課程美術専攻日本画研究領域
豊川宏美	美術研究科博士前期課程美術専攻版画研究領域
菅田比歩海	美術研究科博士前期課程美術専攻立体芸術研究領域
松左川水鳥	美術研究科博士前期課程デザイン専攻メディア研究領域
劉 夢頰	美術研究科博士前期課程デザイン専攻ヒーリング研究領域
吉田菜由	美術研究科博士前期課程デザイン専攻プロダクトデザイン研究領域
舒 文禹	美術研究科博士前期課程デザイン専攻環境デザイン研究領域
森崎由衣	美術研究科博士前期課程芸術文化専攻美術史研究領域

芸術学部	
伊藤夏実	美術学科洋画専攻
長岡 恵	美術学科日本画専攻
進藤尚美	美術学科立体アート専攻
岡本千裕	美術学科芸術表象専攻
松野加奈	美術学科美術教育専攻
田中あかり	デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻
園田星絵	デザイン・工芸学科プロダクトデザイン専攻
山口真歩	デザイン・工芸学科環境デザイン専攻
遠坂美樹	デザイン・工芸学科工芸専攻
染野成美	アート・デザイン表現学科メディア表現領域
三谷桐子	アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
立川玲音奈	アート・デザイン表現学科ファッションテキスタイル表現領域
藏田美裕	アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域

短期大学部	
鈴木里来	造形学科美術コース
南波美帆	造形学科デザインコース創造デザイン

短期大学部 専攻科 造形専攻	
木内佑加里	美術コース
齊藤美穂	美術コース
宮下杏美	創造デザインコース

短期大学部 造形学科	
梶原耕李	美術コース
佐藤愛美	美術コース
田中喜菜来	美術コース
中島玲衣	美術コース
早野遼恵	美術コース
山口知香	デザインコース情報デザイン
鬼嶋美波	デザインコース創造デザイン
小茂田穂子	デザインコース創造デザイン
高井結喜	デザインコース創造デザイン

優秀研究賞

芸術学部	
河田真生子	美術学科美術教育専攻
大柿 董	アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域

※本基金は卒業生・在学生の制作・研究など芸術活動の奨励、アーティリストおよび研究者の育成を主な目的としています。

方々に授与されました。

賞が贈られ、本年度は以下の

の寄付を基に設立されました。

に大村智名誉理事長夫妻から

の寄付を基に設立されました。

本基金の目的(※)のために功

績のあった者、および団体に各

平成29年度 第18回

女子美パリ賞

【パリ国際芸術都市アトリエ使用権】
【副賞 100万円】

中村菜都子

1995年3月 女子美術短期大学 造形科生活デザイン教室 卒業
2005年7月 ロンドン芸術大学 BAグラフィック&メディア イラストレーション 卒業



『The Night Garden』
600×900mm/木版画、箔、刺繍、コラージュ

平成28年度 第16回 女子美制作・研究奨励賞 【副賞 各20万円】

宮本華子

2010年3月 女子美術大学 芸術学部 絵画学科 洋画専攻 卒業
2012年3月 女子美術大学大学院 美術研究科 美術専攻
修士課程 洋画研究領域 修了



『入れないし、出られない。』
インスタレーション

佐々木紘子

2011年3月 女子美術大学 芸術学部 絵画学科 洋画専攻 卒業
2014年3月 東京藝術大学大学院 美術研究科 修士課程
絵画専攻 修了



『瞬く風景(中山)』
可変 / インスタレーション

100周年記念大村文子基金

平成29年度 第11回

女子美ミラノ賞

【ブレラ国立美術学院にて6ヶ月間研究・留学】
【副賞 100万円】

田中直子

2016年3月 女子美術大学 芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域 卒業
女子美術大学大学院 美術研究科 博士前期課程 デザイン専攻
アートプロデュース研究領域 1年次在籍
1938年に日本、ドイツ、イタリアの友好関係を築くために企画された、
児童画コンクール「日独親善画展」をテーマとした、調査研究での受賞。

井上潤美

2012年3月 女子美術大学 芸術学部 絵画学科 洋画専攻 卒業
2016年3月 東京藝術大学大学院 美術研究科 修士課程
油画研究領域 修了



『鳥が鳴ころが夜が明けようが、おらが踊りは止めやせぬ』
ダンスパフォーマンス

平成28年度 第15回 大学院・大学・短期大学部 女子美美術奨励賞 【副賞 各10万円】

シムファン (台湾)
徐 凡 (台湾)
美術研究科 博士前期課程
美術専攻 洋画研究領域
1年次在籍



『目に見える世界-文明として』
水彩 / 333×333mm

パク ネジシ
朴 秀珍 (韓国)
芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
4年次在籍



『H&P (HOME & PARTY)』
照明 / ヒノキ、塩ビ、マグネット、LED

ユ ショシ
劉 時年 (韓国)
造形学科
美術コース
2年次在籍



『憂鬱な悲劇』
インスタレーション /
マグネット、プラスチック、パネル

平成28年度 大村特別賞 【副賞 記念品】

工芸専攻刺繍・陸前高田市立博物館被災染織品の修復チーム

東日本大震災で被災した陸前高田市立博物館の染織品の調査修復作業を、卒業生・教職員・在学生のオール女子美で継続して行っている。

細川要子

1973年3月 女子美術大学 芸術学部 絵画科
日本画専攻 卒業
付属同窓会副会長として長年務め、生徒の修学旅行では各寺社の非公開文化財特別拝観の実現に貢献している。

祝嶺恭子

1959年3月 女子美術大学短期大学部 図工科 卒業
1962年3月 女子美術大学 芸術学部 工芸科 卒業
ベルリン国立民族学博物館所蔵の琉球王朝時代の戦火を逃れた織物を調査研究し、学術的見地からの復元に尽力した。

JAM

造形「さがみ風っ子展」

10.21(金) - 11.3(木・祝)

毎年恒例となった相模原市教育委員会主催による作品展。市立小中学生の作品を展示しました。

創る・伝える・繋がる

女子美術大学デザイン・工芸学科 工芸専攻教員展

12.7(水) - 12.21(水)

伝統工芸から現代美術までに及び、様々な素材や技法で表現された本学デザイン・工芸学科工芸専攻の教員作品を一堂に展示しました。
(21世紀鷹峯フォーラム in 東京「工芸を体感する100日間」関連事業)

平成28年度 女子美術大学大学院修了制作作品展

3.11(土) - 3.18(土)

平成28年度大学院美術研究科博士前期課程を修了する洋画、日本画、版画、工芸(刺繍)、立体芸術、プロダクトデザイン、環境デザインの学生作品を展示しました。

学術交流協定校

ブレラ国立美術学院・女子美術大学交流作品展

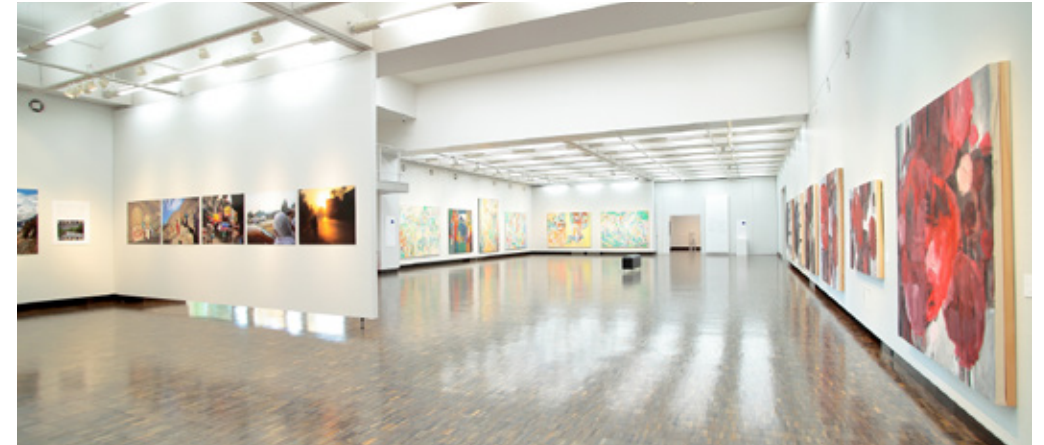
11.9(水) - 12.2(金)

2014年に本学とブレラ国立美術学院が学術協定を締結したことを機会に開催。両校の教員・優秀学生による作品を展示、会期中のワークショップで制作した交流学生との作品も展示しました。

本展は日本での展示の後、イタリア(ミラノ)へと巡回しました。

* ESPOSIZIONE DI OPERE DEI MAESTRI E DEI LORO MIGLIORI ALLIEVI DELL'ACCADEMIA DI BELLE ARTI DI BRERA E DELLA UNIVERSITY OF ART AND DESIGN DI JOSHIBI*
In occasione del 150° anniversario delle relazioni tra il Giappone e l'Italia.

1月17日(火)～2月9日(木) イタリア(ミラノ) 巡回展:日伊国交150周年事業



女子美ガレリアニケ

女子美スピリッツ2016 -入江一子展-

9.9(金) - 10.31(月) ※特別開廊10月30日(日)

本学卒業生でシルクロードの画家・入江一子先生の百寿を記念して開催しました。

平成28年度 女子美術大学大学院修了制作作品展

3.11(土) - 3.18(土)

平成28年度大学院美術研究科博士前期課程を修了するメディア、ヒーリング、ファッションテキスタイル、アートプロデュースの学生作品を展示しました。

六大学合同写真展 ○展

11.11(金) - 11.22(火)

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・多摩美術大学・中国伝媒大学・東方設計学院の六つの大学で各々写真を学ぶ学生の写真作品を展示しました。

AP(アートプロデュース表現領域)卒業制作展

1.13(金) - 1.25(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作を展示しました。

歴史資料展示室

平成28年度収蔵資料展

収蔵資料にみる女子美の歩み 5.13(金) - 3.12(日)

収蔵資料展示を通じ女子美術大学115余年の歴史を紹介するとともに、一部コーナーにて大村智名管理事務長の幼少から現代に到る足跡を特別展示しました。

(※9月9日～10月8日期間大村智名管理事務局長関連の展示資料を110周年記念ホールに移設展示)

2016.12.2(金) - 12.21(水)

杉並 女子美ガレリアニケ

2017.1.6(金) - 2.2(木)

相模原 女子美アートミュージアム

JAM

女子美術大学同窓会設立100周年記念

青のかけ橋 佐野ぬい賞受賞作家展

4.17(月) - 5.22(月)

佐野ぬい賞受賞作家と佐野ぬい先生ご自身の作品を展示します。

中西夏之展

7.5(水) - 8.4(金)

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#02 山口 藍展

4.14(金) - 5.24(水)

女子美ガレリアニケの学芸員が現在注目している次世代アーティストにスポットを当てたガレリアニケの企画展示です。

歴史資料展示室

写真にみる女子美の歩み 一本郷から和田まで

4.6(木) - 8.5(土)

収蔵写真資料と映像資料を中心に本学の歴史を紹介します。

「平成28年度 女子美術大学
女子美術大学短期大学部 退職教員記念展」

今年度の「退職教員記念展」では、杉並キャンパスの女子美ガレリアニケにて佐久間恭子先生、羽太謙一先生、弘中雅子先生の作品を紹介しました。また相模原キャンパスの女子美アートミュージアムにて井上悦治先生、田中いっこう先生、茅野義博先生、馬場章先生の作品を展示するとともに、北澤憲昭先生が指導した博士後期課程卒業生の作品を北澤先生の評論と共に紹介しました。レセプションには、先生方を慕う卒業生や在校生、関係者が参加され、華やかな会となりました。多様な表現活動に取り組む先生方の活動の軌跡をご覧いただくことにより、本学の教育活動の幅広さを感じていただく機会となりました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 浅野正博・李谷吉也
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社 ヒーローズ
発行日 2017年4月3日
©2017 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL <http://www.joshibi.ac.jp>